長門本平家物語の「三鈷投擲説話」

―『源平盛衰記』との比較から―

浜畑　圭吾

はじめに

長門本平家物語巻第五「厳島次第事」には、厳島縁起の一部として弘法大師の「三鈷投擲説話」が見える。三鈷投擲を事前に察知した厳島大明神が、妹「よど姫」に金松を植えさせたというものである。高野開山説話の一つとして多くの文献に取られているものであるが、長門本の内容は他に比して特異なものといえる。平家物語では他に、『源平盛衰記』巻第四十「弘法大師入唐」にも見える。そこで本稿は、長門本と『源平盛衰記』を比較し、その相異点について考えてみたい。語る場所が厳島（長門本）と高野（『源平盛衰記』）とで異なるため、当然、説話の意味も異なるのだが、相異の理由、背景に迫ってみたい。

一、平家物語諸本における「三鈷投擲説話」

まず平家物語における当該説話を確認しておきたい。長門本は巻第五「厳島次第事」の長大な厳島縁起の後に見える。

《①大師入唐》

その証拠、弘法大師に密宗のわたる事は、此神の御願なり。鎮西竈門峯を去て、此島にうつらせたまふ事は、しかしなからこのこゝろさしの故也。されは弘法大師、此神

にむまれあひまいらせ給へり。弘法と申は、漢家本朝代々の賢人也。東方朔、太公望、黄公石、弘法と申是也。賢王代に出給ふ時は、ともに出てつかへ、愚王代に出給ふときは、すなはち逃かくれて出給はす。しかるに我朝に、弘法むまれ給ひて、今此真言をつたへ給ふ。御入唐の時は、先いつく島にまうてゝ、七日参籠あて、「ねかはくは、我密宗をつたへんとおもふこゝろさし、こんせつなり。三十三の願の中に、第一の御願のことくは、我に力をそへさせたまへ」と、きせい申させ給ふ。大明神、あらたに御たいめんあて、「我、神武天皇御代の、たちはしめに、供御のみねなるか故に、かまと山に居すといへとも、是を去て此島にうつりたる事、しかしなから、此法を興行のためなり。とくゝ御入唐あるへし。我現して力をそへ奉へし」と云々。

《②閼伽の桶飛来》

仍弘法入唐をとけたまひて、恵果和尚にあひ奉て、しんこむの奥儀を、きはめて、帰朝せんとし給ひし時、天台山に上、あか水を取て、桶に入て、天になけらる。くろ雲来、是を巻あけて、我朝高野の峯にをく。いまのおくの院の、あかの水、是なり。此黒雲と申は、いつく島の御いもとの、よと姫の威現也。

《③三鈷投擲》

又大師、三鈷をなけ給ふへき事を、厳島先立て、知見ありけれは、御いもと淀姫に仰て、御父沙竭羅龍王にまいらせて、西門の金松を申、高野山にうへをかれぬ。しかるに大師、三鈷をなけ給ふとて、ちかひてのたまはく、「此さんこの、おちつきたらん所を、我なかき在所」と、ちかひ給ふに、三鈷飛来て、かの金松にかゝる。仍、此峯にすみ給ふ。いまの三鈷松、是なり。

《④大師、厳島に法花経等を納める》

大師、是程まて、執し給ひし峯なれは、まことに、両部の山にてそありける。弘法帰

朝の時も、先、厳島に参詣あて、大明神に、金泥法花経一部、唐鞍、瑪瑙の枕、たらえう、此等をまいらせられけり。かのたらえうに、本地の文をかゝれけり。

本体観世音　常在補陀落
為度衆生故　示現大明神

ある岩の下にかくして、おさめをかる。秘密第一の秘所にて、人、是をしらす。大ゑんきにつけて、高野山に、是をつたへて、しれる人、一人はかりあるへしといへり。かやうに、仏法をかねてまもり給へる神明なり。慈悲くはう大にして、誓願自余に、超過し給へり。かくのことく、れいけん厳重の神にましますあひた、院も御しん敬、ましますにや。

弘法大師の関わる箇所を①から④にわけた。後述の都合上、本文には傍線を付した。長門本の管理者として厳島聖を想定された砂川博氏[1]は、この箇所は「弘法大師の威徳」についてはそれほど見られず、厳島側からの関与が強く押し出されているとされた。確かに④においても帰朝後、大師が再び参籠しているのだから、厳島側からの押し出しは相当のものであると判断できるが、③の「三鈷投擲説話」については、「弘法大師の威徳」を認めたい。そして、①から④までの記事を含む長門本の一連の厳島縁起の依拠資料を指摘したのは、黒田彰氏注釈の『源平盛衰記』（三）である[2]。「田中貴子氏教示」として金沢文庫蔵『厳島大明神』（内題『厳島大明神日記（竈門白山一体御事）』）を長門本の依拠資料とした。劔阿写とするこの『厳島大明神日記』は、平成八年に『金澤文庫の中世神道資料』として影印・翻刻が出されており、牧野和夫氏[3]が全海写とする別の一本の紹介もされている。牧野氏は書写者劔阿、全海の周辺を精査され、九国二島から北条得宗家の日元貿易独占を背景に展開した西大寺流によって「極楽寺」ないしは「称名寺」に蔵されたとしており、その伝来経路の解明は大変に魅力的である。さらに氏は当該資料の平家物語流入時期を「長門本延慶本共通祖本」に近い一時期と見定めている。

本稿は書写者に関する問題には触れず、『厳島大明神日記』から長門本が取り込んだ「三鈷投擲説話」の性格解明を目的とする。依拠資料である『厳島大明神日記』とほぼ同文であるが、析出される性格は長門本の他の記述とも通底するところがあると考えている。

次に『源平盛衰記』の本文であるが、巻四十で維盛が出家を決意し、そこで滝口入道の説法を受けた後に続く。

《1大師入唐》

高祖大師ハ大権化現也。讃岐国多度郡人、俗姓ハ佐伯氏、母ノ夢ニ天竺ヨリ聖人来テ我懐ニ入ト見テ妊テ、生ム子也。生産ノ後、四天大王蓋ヲ取テ随従シ給ヘリ。石淵勤操僧正ニ師トシ事ヘテ、初ニハ虚空蔵求聞持ノ法ヲ学シ、終ニ廿ノ歳出家ノ沙弥ノ十戒ヲ受、名ヲ教海ト云、其後改テ如空ト称ス。具足戒ノ時又改テ空海ト号ス。延暦二十三年甲申五月ニ遣唐使正三位藤原朝臣賀能カ舩ニ乗テ、入唐シテ青龍寺ノ恵果和尚ニ謁スル日、和尚笑ヲ含テ云、我兼テ汝カ来事ヲ知レリ。相待コト久シ。今始テ相見大ニ好々々、汝ハコレ非ス凡従一第三地ノ菩薩也。内ニ大乗ノ心ヲ具シ、外ニ小国ノ僧ヲ示ス。為ニタリ密教ノ器一。悉ク可シ授与一トテ、五部灌頂誓水ヲ灑キ、三密持念ノ印明ヲ授テ両部ノ曼陀羅、金剛乗教二百余巻、三蔵付法ノ道具等与畢テ云、「我此土ノ縁尽タリ。不能ニ久住一汝速ニ本国ニ帰テ天下ニ流布セヨ」ト。

《2三鈷投擲》

空海和尚行年三十四、平城天皇御宇大同二年丁亥八月帰朝ノ舟ヲ泛ル日、発願祈誓シテ曰、「所学ノ教法秘密撰所感応ノ地アラハ、此三鈷到点セヨ」トテ、日本ニ向テ抛上給ニ、遙ニ雲中ニ飛入テ東ヲ指テ去ニケリ。和尚行年三十三、嵯峨天皇ノ弘仁七年丙申、高野山ニ登給フ。道ニアヤシキ老人アリ。和尚ニ語テ云、「我ハ是丹生明神、此山ノ山神也。恒ニ厭ニ業垢一、久得道ヲ願フ。今方

ニ菩薩到来シ給ヘリ。妾カ幸也」ト云テ山ノ中心ニ登テ御宿所ヲ示シテ刈掃所ニ、海上ニシテ抛所ノ三鈷光ヲ放テ爰ニ在。秘法興隆ノ地ト云事明也。

《3多宝塔建立》

依之和尚、慈尊三会ノ暁ニ至マテ密蔵ノ炬(トモシビ)ヲ挑(カゝグ)ンタメニ一十六丈ノ多宝ノ塔婆ヲ建立シテ、過去七仏ノ所持ノ宝剣ヲ安置シ給ヘリ。事奇特也。法ノ効験也。女人影ヲ隔テヽ五障ノ雲永クオサマリ、僧俗心ヲ研テ三明ノ月高晴タリ。誠ニ穢土ニシテ浄土ヲ兼、凡夫ニシテ仏陀ニ融ス。難レ有聖跡也。賢クソ女房君達ヲ留置給ケル。引具シ給タリセハ争カ此霊場ヘモ御参有ヘキ。御心強(ツヨ)カリケル御事ハ然ヘキ御得脱ノ期(ゴ)ノ至(イタ)リ御座、永離三悪ノ峯ニ登(ノボ)リ、生仏不二ノ覚(サト)リヲ開給ヘキニコソ」ト細々ト申ケレハ、

「大師入唐」「三鈷投擲」「多宝塔建立」の1～3にわけた。当該記事については源健一郎氏[4]の論がある。氏は、『源平盛衰記』が独自に法輪寺縁起を増補し、「宗論」の記事が削除された理由を、南都僧道昌の扱いを基軸として考察されている。法輪寺縁起が道昌伝といってよい形態であること、削除された「宗論」が道昌の名誉を貶めかねないものであることなどを挙げられ、南都の真言に対する立場からの描出であるとされた。その際、『源平盛衰記』が弘法大師伝を参照したとされ、特に『高野大師御広伝』に依拠したと見られている。『高野大師御広伝』の一致箇所はまとまった形ではないため、寄せ集めて『源平盛衰記』のような本文が形成されたと考えられる。延慶本にも三鈷関係の文言は見えるが、長門本のような纏まった形ではなく、高野の名所巡りの一つとして記されているため、本稿は『源平盛衰記』を手掛かりにして長門本の本文を考えてみたい。

二、三鈷投擲の目的

考察する長門本と『盛衰記』の相異点は二点ある。一点は空海が三鈷を投げる際の「請願」の言

葉である。長門本では「此さんこの、おちつきたらん所を、我なかき在所」とし、『盛衰記』では「所学ノ教法秘密撰所感応ノ地アラハ、此三鈷到点セヨ」とする。『盛衰記』は直前に恵果の言葉として「汝速ニ本国ニ帰テ天下ニ流布セヨ」とあり、また直後に「秘法興隆ノ地ト云事明也」とあることから、空海の請願が真言流布の土地選定を目的としていることは明らかである。一方長門本には『盛衰記』のような本文はない。「我なかき在所」をどう解釈するかによるが、参考として他の「三鈷投擲説話」から請願の言葉を抽出したものを表1として次頁にあげた。成立年の古いもの

表1

文献名	本文
阿波国太龍寺縁起	擲テ三股ヲ於紫雲ニ。ト云生身入定ノ地ヲ。
金剛峯寺修行縁起	我カ所ノ伝ヘ学フ秘密ノ聖教。有ラハ流布相応之地ニ者。早ク到テ可シト点ス之。
秘密家宗体要文	海上之間祈ニ請ス勝地ヲ。
大師御行状集記	所学ノ教法依テ秘蔵ニ択ル処ヲ。吾朝ニ若シ有ラハ感応ノ地ニ到テ点セント此ノ三鈷ヲ。
本朝神仙伝	本朝の勝れたる地をトひたるに
弘法大師御伝	所ノ学ヲ秘教若シ有ラハ相応ノ地ニ者。我斯ノ三鈷飛ヒ到テ而点着セヨト。

から並べている。多くは『盛衰記』のような流布地選定型である。しかし僅かではあるが網掛けを施したもので「入定」のための土地を選定するものも見える。言うまでもないが、空海の「入定」問題は高野山にとって重大事である。寄せられる様々な疑義に反論する『弘法大師御入定勘決記』のような文献はもとより、大師伝中でも入定中の空海の姿を見たという観賢僧正の説話が盛んに語られている。つまり長門本「三鈷投擲説話」の「我なかき在所」も、入定のための「なかき」土地であろう。長門本の場合、高野山の重大事を担うのが三鈷であった。

打聞集	我定入弥勒御世ニ有ヘ所此五古落
高野大師御広伝	所レ学教法秘密。若シ有ニ感応ノ地一者。我カ斯ノ三鈷飛ヒ到テ而点着セヨト。
東要記	我所ニ伝学一秘密聖教。有ニ流布相応之地一者。早到可レ点レ之。
大師行化記	我所ニ伝学一秘密聖教。有ニ流布相応之地一者。早到可レ点レ之。
弘法大師御伝	我所伝学秘密聖教。有流布相応之地者。早到可点之。
大師伝記	入唐受持之密教帰朝流布之弘誓一。而投ニ三股一可レ示ニ縁地一者。
真言伝	所学ノ秘教若相応ノ地有ハ。此三鈷飛至テ兼テ其所ヲ点著セヨトテ。
高野大師行状図絵	我カならうところの秘法。若シ相応の地あらば。吾此三鈷飛至てとゞまるべしと。
高野物語	我学スル所ノ秘密教。流布相応ノ所アラバ。早到テ点ゼヨトテ。
弘法大師行状記	吾カ習ところの秘密の教法もし流布相応の地あらば。今投ルところの三鈷。早クいたりてその所を点ずべし
三国伝記	我レ学所ノ秘教若シ相応ノ地アラバ此ノ三鈷飛ビ至テ留ルベシ
高野興廃記	為レ占ニ真言流布地一。
大師行状附匡房卿申状	我ガ習フ所ノ秘法。若シ相応ノ地アラバ。我此三鈷飛至テ留ルベシト。
高祖大師秘密縁起	我が習所の密教流布相応の勝地あらば。此三鈷先にいたりて点ずべし

三、相伝される「三鈷」

長門本の「三鈷投擲説話」は入定地選定型であり、それを担うのが三鈷であった。そこで本節では製作され、相伝されていく「三鈷」の実態を解明し、入定地選定型の背景を考えてみたい。

三鈷が龍猛菩薩から龍智、金剛智、不空、恵果を経て空海に相伝されていったということは大師

伝などに見ることが出来る。例えば『東要記』には、

或記云。弘法大師両部大法請ヶ畢テ。我朝本国ニ祈ニ祷スル勝地ノ有無ヲ之間。吾本国ノ方ニ見ニル紫雲ノ立ツヲ。爰ニ大師指ニシテ紫雲ノ処ニ投ク三ノ此ノ三股ヲ。此ノ杵ノ落ル処ニ建ニ立ス大塔ヲ。高十六丈。檜ノ廻一面。広八段。内ニ安ニ置ス胎蔵ノ五仏ヲ各丈六ナリ。此ノ杵ハ者南天竺金剛智授ニ不空ニ。々々授ニ不空ニ。々々授ニ恵果ニ。々々授ニ空海ニ。々々授ニ僧正真然ニ。々々安ニ置金剛峯寺中院ニ云々。

とある。空海から真然へと伝えられ、金剛峯寺の中院に収められているとしており、菊地勇次郎氏[6]が「三鈷」は真言宗の正統を示すものであるとするのも容易に首肯できるだろう。氏の指摘する『高野山勧発信心集』の「湛空上人三古事」にからむ三鈷相承問題は、『宝簡集』二十所収「修明門院令旨」『僧湛空金銅三鈷送文』『金銅三鈷相伝事書案』『金銅三鈷相伝記』「僧真教書状」「金銅三鈷送文等添状礼紙書」に詳しい[6]。白河院から修明門院を経て順徳院、そして仁和寺の一宮尊覚法親王へ伝わるはずであったものが誤って公雅法印の娘左衛門督局が生んだ三宮に伝わったという記述は興味深い。小野流から院の血縁を経て天台僧湛空へと製作された「三鈷」が相伝されていく経緯が明らかになる。しかし、製作、相伝された「三鈷」は決して一つではない。湛空三鈷問題に関連して、資料をあげる。

（端裏）

高野三股記　以御室御自筆本書写之

（本文）

此三股者、南天竺龍猛菩薩授龍智菩薩。々々授金剛智三蔵、々々授大弁正不空三蔵、々々授恵果阿闍梨、々々授空海大和尚矣、大和尚受学両部大法畢、我大日本国祈祷勝地有無之間、吾本国方見紫雲立、爰大和尚指紫雲立処、投此三投（股）、々々落処建立大塔、安置金剛界五仏、弘法大師授僧正真然、々々安置金剛峯寺中院、々々別当定観奉持之、定観授大法師雅真、々々授仁海、

々々奉持及六十年、寛徳二年三月十五日記
正嘉二年戊午歳三月十五日、奉拝見此三股、即
書写之、此記昔御室御筆也、以檀帋折帋被書之、
其三股長一尺二寸、不知何金、不似普通金銅也、
其内虚敗、軽従勢分者也、故御室常被仰出云、
近日有誑惑僧、称此三股持一杵、而云、従修明
門女院伝給此三股之由云々、且便宜之時、可被
尋申女院云々、今親拝之、宿縁尤可悦矣、此箱
被入加如意宝珠并不空三蔵御筆ノ入ル経袋也、
宝珠之袋皆以錦縫籠之、不能開之、三蔵御筆之
袋、亦被縫籠之、不及披見也、黒漆箱被入之、
重々皆有御室御封也
如意宝珠血脈
不空三蔵、恵果阿闍梨、空海和尚、真然、
定観、雅真、仁海
已上

仁和寺御室自筆（寛徳二年〔一〇四五〕記）のものを慶政が正嘉二年〔一二五八〕に書写し、識語を加えた『高野三股記』である。[7] 御室自筆記事の相伝系統は真然から定観、雅真を経て仁海まで記されている。その後仁和寺に相伝されたということになるのだが、誤って三宮に相伝された三鈷に付せられていた銘文の日付も「寛徳二年三月十五日」であった。そして注目すべきは、慶政の識語である。慶政は正嘉二年三月十五日に、伝来の「三鈷」を見たあとこれを写したとしており、傍線を付したようにその形状に関心を示している。さらに「故御室」の言葉として、修明門院より伝わった「三鈷」を所持しているという「誑惑僧」の存在が指摘されている。[8] 当然、複数の「三鈷」が存在することは不都合であり、仁和寺側としては修明門院伝来の「三鈷」は偽物という認識であったのだろう。この修明門院伝来の「三鈷」は『宝簡集』所収の諸文献にある三宮経由の「三鈷」と推察される。そしてこの仁和寺伝来の「三鈷」は、誤って伝えられたため相伝できなかった仁和寺の一宮尊覚法親王の周辺で新たに製作されたものではないだろうか。[9]

製作された「三鈷」は複数存在したらしく、『拾

玉集』にも「さりともとおもひ〳〵て祈けむこゝろの根よりはなそさきそむ」という歌の詞書に「文治六年に公衡中将祈祷成就之後、遺巻数返事之次皆水精念珠弘法大師三鈷等送給、つゝめる薄様にかきつけて候歌」とある。「三鈷」自体が信仰の対象となっていたといえる。

さらにこの『高野三股記』で注目したいのは、二重線を付した「此箱被入加如意宝珠并不空三蔵御筆ノ入ル経袋也」という記述である。「三鈷」と同じ箱に保管されたのは如意宝珠と不空三蔵筆の経典を入れた袋であった。不空三蔵は「三鈷」が相伝された八祖の一人だが、如意宝珠は『弘法大師御入定勘決記』に、「以下真言宗之祖師ノ所レノ被ニル、付属セ如意宝珠ヲ上」、「而以ニ此ノ宝珠ヲ可レキ被レル付ニ属セ于大師後身ノ菩薩ニ条最有ニル其處コトハリ一也」と記されるものである。つまり、製作された「三鈷」は、空海の入定の証拠となる「如意宝珠」とともに保管されていたということになる。

小野流に伝わった「三鈷」は仁和寺には伝わらなかったため、仁和寺側は新たに製作したと考えられる。「三鈷」も「如意宝珠」同様、信仰の対象となっていたことは間違いあるまい。『源平盛衰記』のような流布地選定型とは別に、長門本のような入定地選定型が成立した背景にはこうした「三鈷」に対する信仰の発生と拡大があったと考えられる。

四、「金松」「三鈷松」成立の背景

考察すべき相異点の二点目は、三鈷が落ちた箇所である。長門本では、「三鈷飛来て、かの金松にかゝる。仍、此峯にすみ給ふ。いまの三鈷松、是なり」とある。『源平盛衰記』では「刈掃所ニ、海上ニシテ抛所ノ三鈷光ヲ放テ爰ニ在」となっている。長門本が「金松」に掛かっていたと具体的に示すのに対して『源平盛衰記』は特に場所を記さない。長門本はこれが「いまの三鈷松」であるとする。大師伝等で確認してみると以下のようになる。

①『金剛峯寺修行縁起』〔康保五年・968〕

…「為レ建二立センカ伽藍一ヲ截リ払フ樹木一ヲ之間。樹ニ夾テ彼ノ於レ唐ニ所レ投ル三鈷一ヲ厳然トシテ而有リ。」

②『大師御行状集記』〔寛治三年・1089〕

…「聊カ芟掃フ之間。彼ノ抛ル海上一ヨリ三鈷今在リ此ノ處一。」

③『弘法大師御伝』〔永久年間・1113～1117〕

…「為レ結二センカ構一仁祠ヲ截リ払フ樹木一ヲ之時。於テ唐土ニ所レ投ル三鈷懸ニレリ樹間一。」

④『高野大師御広伝』〔元永元年・1118〕

…「為レ結二センカ構一仁祠ヲ截リ払フ樹木一ヲ。於テ唐土ニ所レ投ル三鈷懸ル樹間一。」

⑤『東要記』〔大治年中・1126～1131〕

…「為レ建二立伽藍一截リ払樹木之間。更ニ彼ノ於レ唐ニ所レ投ル三古厳然而有リ。」

古いものから院政期辺りまでを抽出した。「或伝ニ曰」といった、先行大師伝からの引用と思われるものは除外したが、『盛衰記』と同様、落下した所を木の間、もしくは樹木を切り払った所としている。しかし、長門本のような落下点を「松」とする形も外部の資料に見える。

影堂前二許丈有一古松、枝条痩堅年歳遐遠、寺宿老云、大師有唐朝、占有縁之地、遙擲三鈷、飛彼万里之鯨波、掛此一株之龍鱗、聞此霊異、永人感傷、称為結縁、折枝拾実、無不斎待為帰路之資、

『白河上皇高野御幸記』は寛治二年（一〇八八）二月の白河上皇御幸の記録である。[10] 二十八日に御影堂を訪れた際、その前にある「一古松」の説明を寺の「宿老」から受けている。更に注目したいのはその話を聞き、「霊異」を感じて結縁のために枝や実を採取したという記述である。三鈷だけでなくその落下点である「松」も信仰の対象となっているということであろう。また、『山槐記』保元三年（一一五八）九月二十八日条には、「抑御影堂前有四五尺許松樹、相尋由緒之処、昔大師御入唐之時、向本朝方令抛独鈷給、独鈷入雲来懸此樹、仍令占此地給之由、内供所被示也、本此樹大樹也、然頃年枯失了、其後近年自旧根又生長云々」とある。[11] 同年八月十一日に譲位した後白河院

が九月二十五日に精進を始め、二十七日に出発、二十九日には登山したものだが、そこでも三鈷が落下したのは「松樹」であるとする。そしてその松は、一度枯れたものが「旧根」より再び生えたものとする。これは唱導書『高野物語』の巻第四にも「三鈷ノ留リタリケル松樹ノ本ニゾ御庵室ハ作ラレテ侍ケル。今ノ御影堂此所也。三鈷ノ松トテ今ニ侍ルハ。彼樹今ハ枯テ二度生カハリニケルトゾ承ル」と見えるものであり、落下点である松に対する関心の表れと考えられる。

つまり、三鈷だけではなく、落下点である場所が「松」とされ、信仰の対象となっていったということになる。『真言伝』にも「彼唐国ニシテ投給シ三鈷宛然トシテ松ノ上ニ懸レリ」とあり、『弘法大師行状記』は「緑松の梢にかゝれり」、大和大蔵寺本『高野大師行状図絵』も「彼三鈷のかゝれりし松の本をしめて御庵室をつくられけり。今の御影堂是也」とするように、大師伝の中でも次第に「松」がその落下点として記されるようになる。前掲の『高野物語』には「三鈷ノ松」とされているが、これは既に信仰の対象として定着していたことを表す、熟した表現と言えるだろう。

また、『風雅和歌集』巻第十六雑歌中一七八九番歌[12]に、高野へ参詣した阿一上人が、「同山にのほりて三鈷の松をみて」という詞書きで「これそこのもろこし舟にのりをえてしるしをのこす松の一もと」と詠んでおり、「三鈷松」が一種の名所となっていることがうかがえる[13]。『高野興廃記』にも「御影堂前の松に落ち止む故、三鈷松と云ふは是なり」という記述が見えるが、長門本の「いまの三鈷松、是なり」とするのも同様であろう。阿一上人が「これそのこの」とするように、落下点としての松が広く認識されていたと考えられる。また、正徹門下正広の『松下集』一一七三番には[14]、

西琳寺とて律院の庭に、高野の三鈷の松の種を昔うへられ侍し、大木になり侍る、其室の住持たんさくを出し、一首と所望有に

高野山三鈷の種を松の室庭にもうつす和歌の浦なみ

とある。三鈷松に対する信仰の発展形といえるだろう。

このように投擲した「三鈷」に対する信仰は、やがて落下点である「松」にも向けられ、『松下集』の種と同様、各地に伝播していったと考えられる。「三鈷松」とは信仰拡大の過程で発生した表現であり[13]、長門本の「金松」もこうしたものを背景として成立したと考えられる。

おわりに

長門本の「入定地選定型」の背景には伝承から現実に製作され相伝されていった「三鈷」に対する信仰があり、また「金松」にも落下点に対する関心から発生した「松」への信仰があったと考えられる。厳島が関与したのは「金松」を植えたということであるが、直前の「閼伽の桶」にしても、飛来の手助けをしたということになっている。「弘法大師の奇蹟」に関与したということが厳島の主張ということになる。長門本の採用した『厳島大明神日記』には、相当強く「弘法大師信仰」が打ち出されていると言えるだろう。

注

（1）砂川博氏『平家物語新考』第一章第一節「長門本平家物語と厳島聖」（東京美術・昭和五十七年・初出は『鳥取大学教育学部研究報告』第二十一巻第一号、昭和四十五年六月）

（2）『中世の文学　源平盛衰記』（三）巻第十三、補注三十九（三弥井書店・平成六年）

（3）牧野和夫氏「長門本『平家物語』巻五「厳嶋次第之事」をめぐる一考察―『竈門山寶満大菩薩記』を介して―」（『実践国文学』五十号・平成八年）

（4）源健一郎氏「源平盛衰記と南都の真言宗―巻第

四十、法輪寺縁起の増補と「宗論」削除の理由を探る―」（『軍記と語り物』第三十二号・平成八年）

（5）菊地勇次郎氏「飛行三鈷―高野山勧発信心集について―」（『かがみ』七号・昭和三十七年）

（6）『大日本古文書』家わけ第一「高野山文書之一」所収（明治三十七年）。引用に際して表記は一部改めた。

（7）『高野三股記』（図書寮叢刊『伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集』所収・昭和四十五年）。書写者を慶政とするのは同書の解題に従った。

（8）『宝簡集』二十所収『金銅三鈷相伝記』には「於是有正信上人云者、為致衆生之化導、被請諸人兮脱法、称御遺物、賜此宝杵」とある。『高野三股記』が記す「誑惑僧」とは、「正信上人」即ち聖信房滋空のことであろう。

（9）『宝簡集』二十所収『金銅三鈷相伝事書案』に「蓮台寺寛空僧正模此三鈷、鋳作入三衣筥、被持納蓮台寺了、少僧亦復如此持之、」という記述が見える。仁和寺の別当、法務であった寛空の製作を記すものだが、これは蓮台寺に伝えられたのだろう。

（10）『増補続史料大成』第十八巻（臨川書店・昭和四十二年）

（11）『増補史料大成』第二十六巻（臨川書店・昭和四十年）

（12）『拾玉集』五二一二（『私家集大成　中世Ⅰ』・明治書院・昭和四十八年）

（13）國枝利久・千古理恵子『京都府立総合資料館本風雅和歌集』（和泉書院・平成九年）。「三鈷松」という熟した表現は名所巡りの文脈では使い勝手がよかったのだろう。延慶本第五末十一「惟盛高野巡礼之事」では「其後滝口入道先達シテ、堂塔巡礼シ給フ。三鈷ノ松、大塔ヨリ始テ詣給ニ、或ハ秘密修行之所モアリ、或ハ即身頓悟之嵓モ有、或ハ説法集会之庭モアリ、或ハ習学鑽仰ノ窓モアリ。」とする。また、謡曲『高野物狂』では三鈷松の下でシテ・高師四郎が主君平松春満と再会する。

（14）『私家集大成　中世Ⅳ』（明治書院・昭和五十一